Zwei

マサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｚｗｅｉ

【Ｎコード】
Ｎ７３５２Ｒ

【作者名】
マサキ

【あらすじ】
奇跡を信じるくらい純粋じゃない。
運命を考えるほど出来ていない。
想いを伝えられるほど強くない。

これは、そんな苦い少女の甘くて…甘くないお伽噺。

出逢い（前書き）

自分で書いてて、こんなことありえないな……て思いました。

そこら辺をご了承して読んでくださると……

出逢い

『春、夏、秋、冬……
どの季節が好き？』

という質問をされたら皆は、なんと答えるのだろう

ワタシは……どれも嫌い

四季の彩りが何たら～とＴＶで説明している中年の男を観たことがある。

何をほざいているんだろうか、と不思議で仕方なかった。

今もそれは、変わらない。

何で？

ワタシの言葉を聞いた、大体の人はこう投げ掛ける。

そんなの……

夏は蒸し暑いし、
冬は寒すぎるし、
秋はなんだか寂しい、
春は……なんとなく。

聞かれる度にこう答える

けど、本当の理由はこんな簡単な言葉では言い表せない。

高校の入学式前。

これでもかというくらい毎日勉強した。

勉強するのは嫌いじゃなかった……

新しい知識を知る事と色んな事を経験するのは、楽しかったし……

自分が、1人きりじゃないと錯覚できて心強かった。

そんな新鮮な気持ちを忘れた2年後……今、ワタシはまた四季を嫌いになる……

転校生が来るという噂がクラス中に広がった。

新学期、春になると必ず流れる噂だ。

誰かしらは来る、けどその人たちだって自然にクラスに打ち解けてただのクラスメイトになる。

でも、この日……

ワタシの中だけでは……
転校生はクラスメイトなんて簡単なものにはなれなかった。

「はいっ、静かに！！
転校生が来ています。」

そう紹介があり、入ってと催促された転校生は教室の扉を静かに開け、閉め背筋を伸ばして先生の隣に立つ
先生との身長差が目に見えて分かってしまう。

……！？！？

思わず机に足をぶつけて立ち上がってしまった。

1番後ろの席だからといっと立ち上がってしまうと先生からも丸見えだ。

「望月ー、どーしたー？」

我に返ったワタシは、踵を返すように何でも無いです。と言った。

先生の隣にいる彼がうっすらと笑みを浮かべたのが分かり苛立ちは、倍…いや、それ以上に膨れ上がった。

「真崎　捺樹（ナツキ）です。」

……！？！？

何で……

「と、いうことで1番後ろの席の真崎。
その隣が真崎クンの席だ
同じ苗字同士仲良く学校生活を送ってくれー」

近づいてくる……

奴が、近づいてくる……

「ヨロシク、真崎サン」
「……何、で？」
「何でこの名前か？」
「……」

動揺が身体中が巡って、
声が上手く出ない。

「借りたんだー、捺樹に」「宮藤、深舩（ミフネ）……」
「覚えててくれたんだー、もう5年も前なのに」
「5年と、3ヶ月と8日よ！！」
「流石、捺樹の妹だなー、細かいんだからさっ」

忘れるわけがない。

1日だって忘れた事なんてなかった。

いつも近くにいたのに……

兄ともワタシとも……
なのに、
ワタシの大切な兄を×××人
ワタシを奈落のどん底に突き落とした人
復讐を誓った相手……
宮藤深舩……
5年と3ヶ月と8日前にワタシの兄をこの世から消し去った人

出会ってしまった……

ずっと忘れられなかったワタシの春がもう1度。

出会いの春は、最悪な季節だった。
けど、本当の理由はこんな簡単な言葉では、言い表せない。

高校の入学式。

これでもかというくらい毎日勉強した。

勉強するのは嫌いじゃなかった…

新しい知識を知る事と色んな事を経験するのは、楽しかったし…

自分が、1人きりじゃないと錯覚できて心強かった。

そんな新鮮な気持ちを忘れた2年後…今、ワタシはまた四季を嫌いになる…

転校生が来るという噂がクラス中に広がった。

新学期、春になると必ず流れる噂だ。

誰かしらは来る、けどその人たちだって自然にクラスに打ち解けてただのクラスメイトになる。

でも、この日…

ワタシの中だけでは…

転校生はクラスメイトなんて簡単なものにはなれなかった。

「はいっ、静かに！！

転校生が来ています。」

…！？！？

思わず机に足をぶつけて立ち上がってしまった。

1番後ろの席だからといっと立ち上がってしまうと先生からも丸見えだ。

「望月ー、どーしたー？」

我に返ったワタシは、踵を返すように何でも無いです。と言った。

教卓の隣にいる彼がうっすらと笑みを浮かべたのが分かり苛立ちは、倍…いや、それ以上に膨れ上がった。

「真崎　捺樹（ナツキ）です。」

…！？！？

何で……

「と、いうことで1番後ろの席の真崎。
その隣が真崎クンの席だ
同じ苗字同士仲良く学校生活を送ってくれー」
近づいてくる…
奴が、近づいてくる…

「ヨロシク、真崎サン」
「…何、で？」
「何でこの名前か？」
「……」
動揺が身体中が巡って、
声が上手く出ない。
「借りたんだー、捺樹に」
「宮藤…深舩（ミフネ）…」
「覚えててくれたんだー、もう5年も前なのに」

「5年と、3ヶ月と8日よ！！」

「流石、捺樹の妹だなー、細かいんだからさっ」

忘れるわけがない。

1日だって忘れた事なんてなかった。

いつも近くにいたのに…

兄ともワタシとも…

なのに、

ワタシの大切な兄を××た人

ワタシを奈落のどん底に突き落とした人

復讐を誓った相手…

宮藤深舩…

5年と3ヶ月と8日前にワタシの兄をこの世から消し去った人

出会ってしまった…

ずっと忘れられなかったワタシの春がもう1度。

出会いの春は、最悪な季節だった。

記憶（前書き）

2話目っ

のろのろとやってるので、終わりが見えないのですが……、

出来る限り頑張ります！！

記憶

遠くに見た。
遠い彼方から聞こえる。

忘れていた……その声が
『……月』
『誰……？』
『僕だよ、望月……』
『捺樹チャン……？』
『もう、お別れだね。』
『……！？待ってよっ』
『ダメだよ、もう』
『待って、待ってよ……
1人にしないでよ……っ』
こんな暗い場所に置いていかないで……
『ダメだよ……望月。』
『どうして…？』

『泣かないで……？
大丈夫だよ、だって……』

霧の中に消えていく。
兄の姿が、なくなってしまう。
いなくなってしまう。
1人きりに……なってしまう。
行かないで……
待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待っ

て、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って、待って……っ

「待ってよっ！！」
……ハァハァハァ
こんな夢なんて、初めてみた。
捺樹が消えていく夢

反射でベットの上に起き上がってしまった。
恐ろしい……夢。

脳裏に焼き付いて離れようとしない。
捺樹が２度と帰ってこないと分かっている……
いや、分かっていたのに。

あいつは、
捺樹であって捺樹じゃない。

考えれば考えるほど気分が重くなっていく……
こんな事じゃダメなんだ。
気持ちを切り替えよう。
……そ、いえば今何時だ？
時計を確認しないと……
……７：２１。
少し寝坊してしまった。
でも、間に合うか間に合わないかで言ったら余裕綽々なので無論問題はない。

あんな夢を見てしまったからか、全身が汗だらけで気持ちが悪い。
ベタついた髪が頬につくのに耐えられない。

とりあえず、シャワーを浴びよう。

いつもこの時間の電車は、満員だ。
やっぱり寝坊した事を後悔した。

家から学校までは、４０分くらいかかる。
１人でいる事に慣れてしまったワタシには、どーという事はない時間……

教室に入る。
いつもの風景、いつも教室
でも、隣には奴がいる。

「おはよっ」
騙されるな、信じるなっ
自分に言い聞かせる。
相手を睨み席につく。

宮藤深舩……
許せない……赦せない。
本当だったら、今すぐここで殺してやりたい。
でも、まだ殺せない。
ワタシは、何も知らないのだから……捺樹の真実が、何１つ掴むことが出来てない。

なら、簡単なことだ……
目の前に捺樹の事件をよく知る人物がいる。
なら、利用するだけだ。
捺樹のためなら何だって出来るっ！！

捺樹との時間を思い出す……
今朝見た、恐ろしい夢を……
恐ろしい捺樹の言葉を……
考えるな……
考えてはいけない……

人間は、本当に不思議だ。意識してしまうとそこから簡単には、抜け出せなくなってしまうのだから……

あれは、夢だ……
でも、本当だったのかもしれない。
ワタシは、捺樹の事を……
思い出してしまう。
霧に包まれ消えていきそうな捺樹に向かって
『行かないでっ』と何度も何度も叫ぶ。
捺樹は、それに応えようとはしなかった。
叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ……

……！！！！
振り向いてくれたっ
捺樹は、ワタシの元に歩み寄ってきてくれた！！
また、今までみたいに幸せに暮らせるんだっ

朝は、いつも遅刻ギリギリで……
２人で笑いながら校門を駆けて……
一緒にご飯を食べて……
一緒に寝て……

そんな普通な生活が送れるんだと信じてやまないワタシが夢の中に

いる。

捺樹は、言った。

背筋が凍るかと思った。

『泣かないで……？大丈夫だよ、だって……』

『望月は、僕の事を忘れていたんだから』

目を覚ました自分の胸の内には、そうかもしれないと少しの理解があった。

そうかもしれない。

捺樹がいない事が当たり前になって……、

捺樹がいない生活に馴れていく自分がいて……、

ワタシは……っ

思い出すと息が上手く出来なくなる……

ワタシは、教室を飛び出しトイレに駆けた。

痛みも

寂しさも

辛さも

憎しみも

怒りも

涙さえも

全てをトイレの中へと

吐き出した。

記憶（後書き）

皆さん、
これはあくまで恋愛小説であってブラコン小説では無いのですよ？
汗汗

これから……これから、

情ーココロー（前書き）

なんだか、急展開……
急に歌とか挟んできちゃってさ。
話が完結したら、歌詞とか作って載せます。
……多分

情ーココロー

さっきから全身の震えが止まらない。

足が思うように進んでくれない……

このままのペースで歩いていたら完全に授業開始のチャイムに教室にいることは不可能だ。

そう考えると、このまま救護室で休むかそのままバックれてしまうか……

でも、クラスの中で目立つわけにはいかない……

今まで築き上げてきたものが、こんな何でもない日の何でもない行動によって壊されるなんて冗談じゃない。

人殺しだの、
化物だの、
散々言われてきたのが最近になってやっとおさまってきたっていうのに

捺樹は、被害者だ。

なのに、世間はそんなことには構ってくれない。

加害者なら、人殺しじゃねーか……と。
被害者なら、被害者ぶってんじゃねーよ……と。

どちらにしても罵倒される世の中でしかない。
そう思うと、捺樹を優先してしまう。
自分の意思とは別に、捺樹がどう思われてしまうかで判断してしまう。

そう、なると

ちゃんと、授業には出ないとな……
チャイムが鳴る前に教室へ席に着こう。

という、考えに到達する。
壁伝いに歩きトイレから出て目的地に向かう為、右に曲がろうとした時……

「吐いちゃったの？」

！？！？

……宮藤、深舩……

いや、ここでは……真崎捺樹か

忌々しい。
この男が一番捺樹のことを語ってはいけないはずなのに……

「吐いちゃったの？」

2回も同じことを言われなくても質問の意味くらいは、分かってる。

ただ、
弱ってるところに登場されても刃向かう元気がない。
全身が震えて、壁からは手を離せない状態だ。
でも、憎まれ口だけは叩くことが出来た。
「何、覗いたの？」
「やだなー、違うよー」
いちいち語尾を伸ばすなと注意してやりたい。
自分で自分が弱ってると分かってる今、ほんの小さなものにも引っ掛かりを覚えてしまう。
「辛そうな顔して教室飛び出してったからー、心配で……ね？」
何が、ね？だ。
ワタシは、信じない。
「本当の目的は？」
「嫌だなー、本当だって。」
信じられる訳がない……
ワタシは、そうやって貴方を完全に信じていて……大切な人を奪われ裏切られたんだから。
「まぁ、何でもいい……」
「顔色悪いよ？もしかして、そのまま授業出ようとしてるとか？」

ワタシと宮……捺樹は、２０ｃｍ以上の身長差がある。
それのせいもあるのだろう。
お見通しみたいな涼しげな、それでいて本当に心配しているような顔で覗き込んでくる。

……ムカツク

「悪い？」
「悪いよっ、折角の新学期なのにー心弾む、出会いの季節なのにさーっ」
「貴方には、何の関係も無い……」

折角の新学期……？
心弾む、出会いの季節……？

そのワタシの平和を壊したのは何処の誰……！！

距離をとりたい
関係無いという言葉の語尾を強めて言い放った。

「関係あるよっ」
「何の、関係が？」
「……っ」

困ってしまって言葉を詰まらせた相手を見て、優越感に浸ることが出来た。

意地悪をする……まるで、小さい子供のように。

「ワタシと貴方に何の関係があるの？捺樹が貴方の親友だったから？捺樹がここにいないから？捺樹が……っ」

ボーとして上手く頭が回らない……
舌が回らなくて……

「望月チャン……？」
「名前を……呼ばないで……」
「望月チャン……？」
「貴方がワタシの名前を呼ばないで……よ」

足が据わらない……
力が抜けて……

あ……倒れるっ

……
歌が聞こえる……。

懐かしい、あの歌がワタシのすぐそばで聞こえる。
誰が歌ってるんだろう。

……もしかして、捺樹？

目を開けて、確認しなきゃ
「……捺樹？」
違う。
居たのは、宮藤深舩だった。
「あっ、目覚めた？気分はどう？まだ少ししか寝てないからもうち

ょっと寝てた方がイイと思うけどなー」
目の前に宮藤がいるのなんてどーだってよかった、
そこにいるのが捺樹じゃなかった事にショックだった。
「違った。」
「何が？」
「……」
答える気力なんて無い。

何を思ったのか宮藤はアタフタした後、話題を変えた。

「そ、いえば……先生が言ってたよっ
栄養失調、睡眠不足、おまけにストレス性胃炎の疑いもあるって！！
どんな生活送ってんの！！」

その時、脳裏に捺樹との生活が過った。

『ほら、早く寝ないと』
『よく噛んで食べるんだよ？』
『怪我したのか？』
『遅刻しちゃうって』

言い方は、少しキツめだった宮藤の言葉・声・表情
それは捺樹の言葉と重なった……

「捺樹……」
「……望月チャンが寝てるの見て、思い出したんだ。」
「……」
「♪～～～～」

……！？！？

「……紗那(シャナ)？」
「そ。捺樹が作った歌。」
捺樹が、お兄ちゃんがいつもワタシに聞かせてくれたあの歌がここにもまだ生きていた。
お兄ちゃんは、まだ生き続けている。
『望月』
救護室の窓から風が吹き抜けて、それに乗って捺樹がワタシを呼ぶ声が聞こえた気がした。

その瞬間、ワタシの中で何かが弾けとんだ。
ストッパーが外れ、今までどんな事があっても流した事なんてなかった……
捺樹を無くした痛みより深い衝撃なんて無かったから。
流したことのない、涙
「……な、つきぃぃ」
ワタシは、捺樹の名前を呼びながら頬に流れる涙を感じた。
「望月チャン……」
「なつ、……っ」
何が起きたのか分からない。

分かろうともしなかった。
宮藤の腕の中にいるワタシの身体。
宮藤の袖をキュと掴む……
その度に宮藤は、ギュとワタシの身体を抱き寄せた。

その時、思った。
この人は……
宮藤深舩は、何故ここまでワタシに気を遣ってくれるのだろうか。

憎むべき相手なのに……
恨むべき相手なのに……

情ーココローのどこかで、この人をもう1度信じてもいいんじゃないかと……

情が、
迷いがうまれてしまった。

迷い（前書き）

なんだか…、

ワケがわからーん！！！

迷い

昨日……
何が起きたのだろう
ワタシは、まだ救護室に2つあるベットの窓に近い方のベットの上に横になっている。
ーーーーーーーーーー
「……な、つきぃぃ」
「望月チャン……」
「なつ、……っ」
「……」
「な、つきぃ……」
「大丈夫、大丈夫だから」
『大丈夫、捺樹はいる』
ーーーーーーーーーー
聞き間違える訳ない。
「何だった……の？」
捺樹は、いる……？
分からない、分からない。捺樹は、アイツに殺られたんだ……だからアイツを消す為に、この5年と3か月と9……っ
「1日経ったんだ……」
何であの時、2人になった絶好のチャンスに殺らなかったんだっ
5年と3か月と10日……
待ちに待った光景がそこには広がっていたのにっ
何で、何で、何でっ
（（ダンっ！！
くそ……っ
「何で、迷ってんの……」
1日経っても、2日経っても教室の中じゃ何も変わらない。

変わったのは……
「「ねぇっ！！」」
周りの態度だった。
「真崎サン、捺樹クンと仲イイんだね？」
はっ……？
1日の間に何が……、
前は……
ーーーーーーーーーー
「ねぇ、真崎サ「止めなよっ」」
「何で？」
「5年前にお兄さん亡くしてから1人になっちゃったらしいよ？」
「えっ……！？」
「親に殺されたらしいよ」「……」
「それから笑わなくなっちゃったらしいし……」

『だから、真崎サンには関わらない方がイイよ』
ーーーーーーーーーー
違う、でも否定なんてしない。
他人（この人）に真実を教えたって何の解決にもならない。
ワタシは、ワタシの手で……っ
「真崎サン、捺樹クンて付き合ってるの？」
「捺樹クンのメアド知ってる？」
「捺樹クンと毎日一緒に帰ってる、て本当？」
その名前を簡単に呼ばないでよっ
お兄ちゃんの名前を……
でも……
「……？」
な、訳がない。
アイツと一緒にいるくらいなら舌を噛んで死んだほうがマシだ。
いったい誰がそんな……

「誰がそんな事て顔してんね」
……宮藤っ！！
こんな噂を流している奴がいるのに教室の扉に寄りかかって……
まるで、犯人を知ってるよーな顔をしてっ！！
……苛つく。
「行こっか、望月？」
いきなり呼び捨てにされて気持ち悪かったのか、ワタシの身体中に寒気がした。「もう放課後でしょ？」
だから……何？
「帰ろっ」
手を引かれる。
教室の中から聞こえる。
本当だったんだ、
ちょっとショック～、
捺樹くーーーん、
でもさ？

『2人お似合いじゃない？』
「……」
「……」
「連れだした事、怒ってる？」
「当たり前でしょ！！」
「……」
「何、文句ある？」
「誰があんな事言ったのか教えてあげよっか？」
「知ってるの？」
「俺だよ」
「はっ……？」
「俺が言ったの。いつも一緒に帰ってる～とか、
ずっと昔からの幼馴染み～とか、

付き合ってた～とか♪」
「何でそんな事……っ！！」
「……」
「何か、言いなさいよっ」「口実。」
理解不能。
これ以上、耳を傾けるな……
「望月チャンと一緒に居られるかなぁー、て」
消えてしまう
「……俺が一緒にいたいからかなぁー。」
捺樹が、消えてしまう
「望月チャンが俺の側から離れられないようにする口実。」

殺さなきゃ…、
コイツの全てを壊すように……
本当に？
ワタシの情（ココロ）は、真崎捺樹には無いんじゃないか。
宮藤深舩に移ってしまっているんじゃないか。

消えてしまう……
ワタシから捺樹が、ワタシからあの5年と3か月と10日が、
消えてしまう

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い
消えないで。

温もり

まだ、握られたままの右手首だけがワタシ達をココに引き戻す。
「望月チャン？」
「……」
「無視？今告白したつもりなんだけどなぁー」
告白？
宮藤深舩が？
ワタシに？
ない、ない、ないっ
「ないっ」
宮藤の手にワタシの右手首が握られてるのを見て、胸が1度ドクンとなったのが分かって手をほどこうとする。
……ほどけない。
「何が？俺が望月チャンを好き、て事？それとも……俺、振られた？」
ほどこうと緩めた手をもう1度宮藤が強める。
「どっちもっ」
ほどけない。……バカ力っ
「離してよっ」
「何で？」
「バカじゃないの？」
「元々。」
殴ったって良かった。
正当防衛とか適当な事言ってしまえば良かったのに。
「……」
宮藤の顔がいつもより真剣に見えてしまって……
抵抗出来ない。

「キスして、い？」
「はっ？そーゆーつもりないか……っ」
口を手で塞がれて、言葉を発する事ができない。
「俺は、そーゆーつもり。」
力ずくで退かす。
「ないからっ」
「何で？」
「何でもっ！！」
何を言うのかと、何故自分を攻めるのかと、
「俺が捺樹を殺したから？」
心の底から思った。
「な、に……？」
「そうだろ？」
さっきとは、まるで違うように胸が1度鳴った。
「本当……？」
「……」
何も言わなかった。
でも、何も言わないという事それは肯定になってしまうから…。
宮藤の口からこんなハッキリと聞くなんて思ってもいなかった。
少し……ほんの少しだけ、違うという可能性を願った。
「でも、望月チャンを好きなのも本当。」
あぁ……
確信してしまった。
『でも』『なのも』なんて質問を肯定してるからこそ出た言葉だ。
「そう……」
今だけは、怒りが憎しみじゃなく……悲しみや痛みがワタシを襲った。
真実に落胆している。
「望月チャン？」
「離して……」

「俺、本当に望月チャンが……っ」
「離してっ！！」
もう振り回さないで……
「……」
「……」
何に対して苛ついているのか、何がそんなに気に入らないのか、分かっていた。
分かりたくもなかったけど……
「分かった。」
宮藤の手で握られていた右手首が開放的で風を受けて冷たく感じた。
「……」
離された手は、制服のポケットの中へと消した。

どこへ行く訳でもない。
ワタシは、目的も無いまま歩き出した。
路地を抜ける。
カビ臭くて、今のワタシには1番お似合いの場所に思えた。
ふと、ポケットにしまわれた手を出す。
まだ、少しだけ宮藤の手の感触が残っている。
知りたかったはずの真実が、ワタシに重くのし掛かる。
悔しい……
知りたくなかったと思っているなんて。
さっきまで宮藤に握られていた右手首を自分の左手でなぞってみる。
ワタシは……
「真崎サン……？」
同じクラスの彼女に話しかけられたのは、カビ臭いこの路地裏が初めてだった。

勘違いと空回り

彼女の名前は、長谷川つぐみ
同じクラスの委員長。
週に4回、学校の近くにある『リユーウ』という喫茶店でアルバイトをしている。
と、今本人に聞いた。
クラスの人には興味ないから、もちろん彼女の事も

「そーいえば……噂、凄いね。」
やっぱり、信じてる人が大半なんだ。
「信じてるの？」
「何で？」
何で、って……
「皆、信じてるじゃん」
「本当じゃないの？」
迷った。
この人に“あんな噂は全部嘘”だと言ってしまえばいいのに……
ワタシの中では、あんな噂が流れた事にもうっすらと喜びを感じている。
だから……
「ご想像にお任せします。」
言わなかった。
「じゃあ、信じない。」
「そう。」
「……友達にならない？」
「……」
さっきから話題が飛び飛びで何を言っているのか分からない。
「なろーよっ」

「……どうして？」
彼女と友達になる理由……
「週４回もバイトだと、友達とか全然居なくてさぁー」
これだけ明るい性格なら友達が１００人いても不思議じゃないのに。
……意外。
でも、
「ワタシじゃなくてもいいでしょ、他の人に言いなよ。」
関係ない。
「友達になってくれるの！？」
「違う。」
今のをどーやったら肯定と受け止める事が出来るのだろうか……
１つ分かったのは、この『長谷川つぐみ』という女は、スーパーポジティブシンキング。
「何でーーー！！」
「人と関わりたくない。」「……嘘つき」
「え？」
ポツリと何かを呟いた彼女の声は、ワタシの耳には届かなかった。
「ねぇ、好きな人とかいないの？」
また、話題が変更。
「いない。」
「気になる人とかは？」
「いない。」
「本当？」
「だからっ、人と関わりたくないんだってばっ！！」
しつこい……
「本当に？」
あまりにしつこ過ぎる。
彼女のスーパーポジティブシンキングを考えてもここまでしつこく言われると、正直イライラする。
「どうして、そんなにしつこく聞くの？」

「え……」
「そーゆーとこだと思うよ？友達いない理由。」
「あ…」
下を向いてしまっている顔にうっすらと涙が浮かんでいるのが分かった。
……面倒くさ。
言いすぎてしまったか、と後悔しそうになったけどこの気持ちの方が上回ってしまった。
「泣かないでよ……」
「……だ、って」
「理由があるなら話せば？そんな事で怯んでないで」
「……」
何も言わない。ただ、鼻を啜る音だけが聞こえて……後は、沈黙。
でも、その音は息を整えている事が分かる。
「何？」
次の言葉を催促すると、迷い混じりで答えた。
「……に、なって……それ、で……」
殆ど聞き取れなかった。
「何、も1回言って」
今度は、ちゃんと聞き取る事が出来た。
油断していたワタシは、思わず目を瞑ってしまった。それに返事はしない。
「真崎クンが好きなの？」
「全然。」
「えっ」
何に驚いたのか、笹野サンは間抜けな声をあげた。
「でも、一緒に……」
笹野サンが不思議そうにしているのが面白かった。
本当の事を言うべきなのだと分かってはいた。
でも……

「そうだよ？」
彼女に嘘をついた。
「好きじゃないのに……」
「じゃないよ？」
沈黙があった。
口を開いたのは、笹野サン
「……真崎クン、下さい。」
「は？」
「どうして気づいてあげないんですかっ？」
いきなり怒鳴られて驚くというよりかは、不思議という単語が頭をグルグル回る。
「真崎クンの気持ちっ」
「何、それ。」
「真崎サンが、好きなのに……」
さっきまで起きていた出来事がフラッシュバックして、彼女に顔が見えないように下を向いた。
「それ、嘘だよ。」
「嘘じゃありません。」
「嘘。」
「言ってましたもん。」
「……」
「望月チャンには、ずっとツライ思いとかさせちゃったけど俺は傍にいるんだっ、て。」
ワタシには、言わない言葉も思いもこの人には言えてしまうんだと胸の奥で疼いている感情を見つけた。
「ワタシには、関係ない。」
本当に。
「真崎サンは、ワガママですっ」
「で？」
「真崎クンを下さいっ」

同じ事を繰り返す彼女に苛立ちを覚えてつい言い返してしまった。
「何？それで？
勘違いしてんじゃない？」
「何を、ですか」
「ワタシは、貴方みたいに真崎クンに何か言われた訳じゃないし、」
「あ……」
「それに下さい、下さいってそれを決めるのはワタシじゃなくて真崎クンだからっ」
「……」
「真崎クンに言ったら？
ワタシのものになって下さいって、ね。」
「そんなのっ」
「結局、自分の事しか考えてないのは貴方でしょ？」
次を冷静に判断できた。
笹野サンが、顔を真っ赤にして腕を振りかぶっているのを……
「……っ！！」
「……っ」
数秒後、
頬に痛みがはしるのが分かった。
ワタシは、どんな顔をしていたのだろうか。
彼女は、自分のした行為に酷く罪悪感をもってしまったんだろう。
走って行ってしまった。

『口実……』
「こっちは、既成事実だよ……」
ワタシは、まだ気づけない。
あの時、胸の奥で疼いていた感情が
『嫉妬』
という醜い感情だと。

一緒に……

『見ちゃったの……救護室に2人でいた時の事……』
「え……？」
「名前呼びながら抱き合ってたでしょっっ！！」
ここまで聞いて、やっと分かった。
彼女があの時の出来事を見ていたという事に……
今更……だ。
「それは……」
「それは？」
口に出してみたものの“実は捺樹って名前はワタシの兄のもので、アイツの本当の名前は宮藤深舩という”なんて、どう考えたって言えるわけもない。
というか、言ったって信じてもらえるわけがない。
そう考えると言葉に詰まってしまう。
「抱き合ってたでしょ？」……っ
「……うん。」
今は、ただただ頷く事しか出来ない。
「好きなの？」
色んな葛藤があった。
“宮藤を好き”という言葉に異常に反応してしまっている胸がワタシに本当の気持ちを気づかせようとしている。
「違う。……それ、だけは」
無理矢理気持ちを押し込めたからか、言葉が不自然に途切れてしまった。
そんな口調だったから、相手の反応が気になった。
「捺樹クンは？真崎サンが好きなの？」
その言葉を聞いて、さっき起きたばかりの出来事の一部始終が頭に浮かぶ。

『俺が望月チャンを好き、て事？』

こんな事……

「知らない。」

「どうして？」

「関係ないからだってば」

「どうして？」

質問の意味が分からない。「どうして関係ないって言葉で捺樹クンから逃げようとしてるの？

……っ！！！！

「何、それ……」

「その通りでしょ？」

「だからっ、何がっ！！」

思わず、力が籠る。

「まるで、関係ないって自分に言い聞かせて捺樹クンの存在を消そうとしてるみたいに見えるっ本当は、アタシが捺樹クンって言う度に波打ってるくせにっ！！！！！」

「思ってないっ！！」

「好きなんでしょ！？」

「違うっ！！」

「嘘、言わないでよっ！！」「アナタに何が分かるのっ！？」

「ならっ……」

彼女の声が、急に落ち着きを取り戻したように静かになった。

「なら……捺樹クン、アタシに頂戴よ……」

彼女の声が微かに震えているのが分かった。

きっと……悩んで、悩んで、悩んだ結果に言ったのか……

それとも、初めからなのか……

苦しそうで、辛そうで、同情さえ芽生えた。

……のかもしれない。

あげる、あげないなんて簡単に言えない。
宮藤は、ワタシのものじゃないんだから……
もし、言うとしても“あげる”って言うに決まってる。
なのに……バカ。
「嫌……」
無意識だった。
独占欲が……独占欲だけがワタシを支配していた。

「……っ！！！！！！！！」
パンッッ

しばらく、何が起こったのか分からなかった。
数秒後、ワタシの右頬にヒリヒリとした痛みが走った。
あぁ……
「ズルいよ……、そんなの」
何も言えない。
「ねぇ？」
あぁ……
「何で、捺樹クンなの？他の人じゃダメだったの？」
答えなんて、分かっていたけど。
「アナタと同じだと思う……」
戻れない。
「アタシ、結構捺樹クンと仲良かったの……学校で会えばいつでも話してたし、いつでも笑ってた。……アタシにもチャンスとか、あるんじゃないかなって。」
矛盾してる。
なら、ワタシにこんな事言わなくたっていいのに……
「じゃあ、何でワタシに……？」
「……」
沈黙の中、彼女の言葉を待った。

「いつも話をするのは、ワタシ。捺樹クンは、ただ聞くだけ。」
「それでも、いいじゃん……」
「でもっ、たまに話してくれたりした。その時の話題は、必ず真崎サンの事で……」
何……？
「真崎サンは、何処に行った
何が好きなのか、とか
何が嫌いなのか、とか
笑うのか、とか
怒るのか、とか
友達いるのか、とか
全部、全部、全部、全部……真崎サンの事ばっか」
そんなの……
「ねぇ？捺樹クン、頂戴よ」
ごめんね……
「それは、捺樹自身が決める事だから……」
また、宮藤の事利用してごめんね……
「どーして……？
また、捺樹クンの事利用して逃げてっ！！……最低っ」本当だ……
ただ、利用してるだけ。
最低だ……
でも……

パンッッ

ワタシがやられたように彼女の同じ場所へ
「お互い様。」
私は、この生き方しか知らないから
「……っ」
彼女は、泣きそうな顔をしていたかもしれない。

泣いてしまっていたのかもしれない……。

彼女を見る事は、出来なかった。
もう日が落ちて、薄暗くなった。
カビ臭い路地裏のアスファルトにヒールの駆けていく音がした。
ワタシの頭に響いた。
だんだん遠くなっていくその音に、下を向いていたワタシは、どんな顔をしたらいいのか分からなかった。
追いかけない。
相手を見ない。
何も言えない。
何も言わない。
……何も言ってはいけない。

『最低っ』
彼女のその言葉が、私の胸に突き刺さった。
分かっていたから……
本当は全部……分かっていた。

本当に……
ワタシは、卑怯だ。

告白

気がついたら、ワタシはいつもの朝と同じ天井を目にした。
カーテンを越えて入ってくる日差しが眩しすぎる。
「……痛っ」
昨日の一撃の余韻がワタシの右頬を刺激した。
……今日もまた学校。
長谷川つぐみ……せめて彼女が同じクラスじゃなかったら行きやすかったのに。そんな事を考えながら、ダルい体を精一杯動かした。
「おはよー」
「おはよっ」
「おー、はよっ」
ワタシに対する態度が明らかに変わっていた。
いつもは、目すら合わせない人ばっかなのに……
挨拶の嵐だ……
ワタシに向かって交わされる挨拶を全部、曖昧な会釈で済ませて席につく。
隣の席にアイツは、いない。
まだ、来てないだけなのかましれない。
ただ、空いている席を見た時……“良かった”と“来なければいいのに”と思ってしまった自分がいる。
昨日あんな事があったんだからそれもそうか、と納得すらしている。
「おはよ。」
空気が変わった気がした。いつもと何ら変わらない彼の声にビクついたり……しなかったり、したり……。
声のトーンも、明るさも……全部が彼だった。

いつも通り、
いつも通り、

いつも通り、
そう自分に言い聞かせたのが良かったのか、1日何もなくうまく過ごせた。
と、思っていたのに……

［屋上に来て　鈴堂　弥］
下駄箱を開けて靴を取りだそうとした時、1枚の小さな紙が落ちた。
「何、これ……」
いつもと違う文面をみて、驚きを隠せない。
［人殺し］
［被害者ぶってんな］
［穢れてる］
そんな事ばかりが並べられた紙しか見た事が無かったから……まさしく、予想外の文面。
結局、出した答えは……
「帰ろう……」
靴をタイルの上に置こうとして、少し前屈みになったとき……
鞄が掛けられてたいた方の腕を引っ張られて、その反動で床にドスッと音を立てて鞄が勢いよく落ちた。
「宮藤……」
折角、1日何事もなく乗り越えられると思ったのに……
妙に真剣な宮藤の顔なんか見てしまったら……
「それ、鈴堂から？」
何で知ってるの……？
「て、書いてある。」
「屋上だろ？」
「行かないよ？」
……なんか
「アイツ、真剣なんだっ……だから」
……それって

「行くだけでもいいから……さ」
鈴堂、て人を応援してるみたいに聞こえる……
それが、何よりも気に食わなかった。
「行かないっ」
「あいつの気持ちも考えろよっ」
……全部、嘘だったんだ。
「ワタシの気持ちは……？
宮藤の言葉で頭ぐちゃぐちゃなのに…っ」
何、口走ってるんだろ……
ただ、そう考えると苛立って、苛立って
「行けばいいんでしょ……」
「ちょ……っ」
行かないと言えば、行けと言う……
行くと言えば、戸惑ったような……躊躇っているような声で引き止める……
心の中で“どうしたらいいのよ”と叫んだ。

床に落ちた鞄を乱暴に拾い上げ、屋上に向かった。
決して宮藤に言いくるめられた訳じゃない。
ただ、1歩でも早くこの場から離れてしまいたかっただけ……

屋上の冷たい風

5月直前の風はまだ冷たくて、スカートを履いたワタシの足を容赦なく攻撃してくる。
「あ……」
鈴堂クンらしき人物が声をあげた。
「用事、て？」
この妙な空気も、
冷たい風も嫌ですぐに質問した。
さっきの宮藤との事もあって、すこし……いや、だいぶぶっきらぼうだったかもしれない。
ワタシのイメージが違ったからか、急にオドオドし出した。
ハッキリしない人。
「あ、うん。捺樹に聞いたかもしれないけど……」
何、この空気……
「実は……」
やっぱり、こんなとこ来なければよかった。
「好きですっ、付き合って下さいっ」
イライラする。

「ワタシはーーーーー……」

「望月チャン……」
どうして、待ってるの？
「宮藤……」
下駄箱の壁に寄りかかっている。
手には何もない……多分、この30分間何もしないでただただ待っていたんだと思う。

「行ってきたの？」
「さぁ、どうでしょう。」「行ってきたんでしょ……？昔から素直な子だからね。」
何でも知ってるみたいに言わないでよ……
「悪い？」
「全然、で……言われたんだ」
「何を？」
惚けてみる。
「好きだー、て」
宮藤が笑った。
確かに笑っているのに…
「言われたよ？」
「何て答えたの？」
「関係ないと思うけど」
「……」
ほら、何も言えな……
「関係あるよ……、望月チャンが好きだから」
また、だ。
「何、それ……」
「好きな人が、他の人に告られてんのに……
気が気じゃないよ……」
ほら、また……
「何て、答えたの？」

真剣な顔をするから……

逆らいたくても逆らう事なんて出来ない。
「断った、よ……」
「どうして？」
矛盾。

断って欲しかったのか、そうじゃないのか……
「知らない人だったし。」「嘘。」
なんで……
「やっぱ、嘘下手だね……本当は？」
なんで、分かるの？
「他に好きな人いる。」
「誰？」
本当、バカ……
「断る口実に決まってるでしょ？」
「嘘。」
「……」
本当、バカ……だよな、ワタシ。
でも……
「言えないよ」
宮藤だなんて、言えないよ。
「何で？」
「どうして、そんな詮索するの？」
決まってる……
「望月チャンが好きだから」
ほら、ね？
「ワタシは……」
「教えてよ、気持ち」
期待が……
「ワタシは……っ宮「「捺樹クーン」」」
「あ……」
「探したんだよ？今日、カラオケ行かない？」
「ごめん、今……」
そうか……
「前に約束したじゃんか～っ、ねっ？」
やっぱり……

「行こーよっ」
期待なんて……
「……ねぇ、もしかして彼女？」
「違うっ！！！！」
宮藤が、怒鳴るような声をあげる。
けど……
私に気づかせた。
期待なんて、してない。
「行ってくれれば？」
「望月チャン……？」
してない。
「じゃあ、ね」
してない。けど、
そんなハッキリ言わなくてもいいじゃんか……

宮藤に背中を向けてから喉元に込み上げるものを感じた。
熱く……
冷たく……
頬に流れるそれを声を殺しながら、手の甲で拭いた。
『教えてよ、気持ち』
そんなの……
「こっちが、知りたいよ……」

立ち止まってしまった。
前に進めない。
後戻りも出来ない。
胸の中にあるこの大きな蟠りが何なのか……
知ってしまったから。

真実へ

あれから2週間
ワタシは、外に出なくなった……もちろん学校にも
体がダルい。
長谷川サンのことも、
鈴堂クンのことも、
宮藤のことも。
考えると頭の隅の方が痛くて……痛くて……、破裂してしまいそうだ。
学校に行ったところで、友達もいない。
長谷川サンに酷い事をしてしまって……
鈴堂クンにも……
隣の席には、宮藤がいて……笑ってる。
あぁ
ワタシの人生、て本当……
「薄っぺらい。」
♪∴ピンポーン〜
「誰……？」
今まで、2週間誰も訪ねて来ることなんてなかった。というか、この5年間に人が訪ねて来たのなんて5人がいいとこだ。
近所に住んでいる人は、悪魔だの死神だの……化物扱いだし。
「宮、藤……」
きっと外は、寒かったのだろう……
宮藤の首に巻かれているマフラーから時折見える鼻が赤くなっている。
「ごめんね、いきなり」
あの時と同じ笑顔だ。
「いや……」

「望月チャンに嫌われてるのも知ってる」
確かに笑っているのに……
「俺を避けてる、て事も」辛そうで……
「だから、学校に来ないのも……」
悲しそうで……
「全部、俺のせいだ。」
自分のことだけを責めて
「俺が捺樹に近づいたのも、望月チャンの側に戻ってきたのも……」
同情してしまいそうな……
そんな顔で。
「だから、望月チャンからもう離れようと思って」
まるで……
「最後に挨拶ってか……言わなきゃいけないことあって……でも」
今にも……
「その前に……」
泣いてしまいそうな……
「望月チャンが俺のこと、好きじゃなくても俺は……」
そんな顔で……
「ずっと、望月チャンが好きだから。」
微笑んだ。
「何、それ……」
なんだか、宮藤の無理しているような笑顔が
別れを告げているようで……
「本題、入ろっか。」
宮藤の顔から笑顔が消えた。
真っ直ぐ見つめる宮藤の瞳にトクンと胸が鳴った。
「捺樹は、生きてる……」
「は？」
「殺した。
けど、生きてる。」

前にも聞いた、それって……
「どーゆー意味？」
「病院にいる。」
「病院？」
「今、動けないんだ……」全くと言っていいほど、話が見えない。
「1から説明してっ、
そんなの……そんなんじゃ分かんないよ」
「ここで話すより、本人に会った方がいい。」
殺したと言ったり、生きてるといったり振り回されっぱなしだ。
「行こう。」
上着を着てないワタシは、その寒さに身震いしてしまった。
手を引かれる。
トクン……トクン、トクン、トクン……トクン……
段々大きくなってくこの音に本当は、気づいていたけど……悔しい
からずっと
下を向いたままで。

確信

どこの病院だろうか……
外壁はボロボロ、壁や床かヒビだらけで……
まるで、お化け屋敷だ。
それに気温も低い。
それは、病院と呼ばれる建物の中でもあまり変わらない。
ただただ、冷たい。
どこまで歩いても見る限り壁・壁・壁……
その時思った。
ここは、囚人を閉じ込めておく牢獄みたいな……
「ここ」
前を歩いていた宮藤が立ち止まり、指差す方向には少しだけ光がもれている扉があった。
そこには、間違いなく『真崎捺樹』というプレートがかかっていた。
「早く……」
催促されるがままに扉を開ける。
今までの景色が嘘だったかのように逆光が目に映える。
「……っ」
「〜〜〜〜〜〜……？」
確かに聞こえた。
聞き覚えのある声、ただ逆光で顔を見ることが出来なかった。
「なんで、望月がここに！！」
「捺樹チャン……？」
何かが、おかしい。
感動の再会……たはずだったのに
「帰るんだっ！！！！」
「捺……っ」
「帰ってくれっ！！！！」

「甘えてんなっ！！」
今まで聞いたことのなきくらいの声で叫んだ。
耳から伝わるその声が頭に響いた。
「宮藤……？」
「望月チャンは、強くなった」
「どーゆーことだよ、深舩……」
「もう話してもいいと思う……１０年も経ったんだ。」２人が何を話してるのか分からなかった。
「捺樹、ちゃんと言っとけ」
「深舩…っ」
「じゃあ、な」
が閉まっていく……

宮藤が部屋から出て

なんてことのないのに、何故かとても悲しく思えた。「望月……？」
今まで聞いたことのなきくらいの声で叫んだ。
耳から伝わるその声が頭に響いた。
「宮藤……？」
「望月チャンは、強くなった」
「どーゆーことだよ、深舩」
「もう話してもいいと思う……１０年も経ったんだ。」２人が何を話してるのか分からなかった。
「捺樹、ちゃんと言っとけ」
「深舩……っ」
ゃあ、な」
扉が閉まっていく……
宮藤が部屋から出ていく……
なんてことのないのに、何故かとても悲しく思えた。「望月……？」
宮藤が出ていった後もずっと扉を見ていたワタシに、ベッドの上で

横になっている捺樹チャン”……
先に声を発したのは、捺樹チャンだった。
「なんでもないよ……」
そうだ……
今、知りたいのは2人が何の話をしていたか。
「さっき言ってた、もう話してもいいこと、て何……？」
「それは……」
さっきから気になることは、1つじゃない。
目は動いているのに……
体が1mmも動かされていない……起き上がってもいいのに……
でも……
「何を聞いてもいいように準備したよっ」
「え……？」

「だから、言って？」
もう捺樹チャンが1人で、悩まなくてもいいように……
「全部、受け止めるからっ」
1人で思い込まなくてもいいように……
「ワタシは、捺樹チャンを助けたいからっ」
もう捺樹チャンが、
1人でこんな所に居なくてもいいように……
ワタシが、力になるから……
……ね？

全部かは、分からない。
でも、今捺樹チャンが話せることは全てだったと思う。
1度も目は、会わせてくれなかった。
ただ、それだけ胸の中で渦巻いていたんだと……
それだけずっと胸の中に秘めていたんだと……
ワタシが知っていた事は、

宮藤深舩が側にいたこと、
友達で、親友で……
それだけ。
教えてくれた、そるはあまりにも残酷過ぎた。
今は、どこにいるかも分からない両親がワタシ達に暴力をふるう人だったと……ワタシがまだ7歳だったとき、両親がワタシを刺殺しようとしたこと、
それを助けようとした捺樹チャンが巻き込まれてしまったこと、
そこに宮藤が居合わせていたこと、
宮藤は足がすくんで捺樹チャンを助けることが出来なかったらしいこと、
捺樹チャンは重傷だったけど我に返った両親が病院に連れていってくれたこと、なんとか一命をとりとめたこと、
刺されたショックの後遺症として首から下が全く動かないこと、
今でも毎日のように宮藤が会いに来てくれていること……
ワタシは、何も知らなかった。
「望月、ずっと1人にしてごめんね……？」「ううん……でも……」
「……どうした？」
「でも、ワタシ何も知らなかったよ～～」
捺樹チャンも今まで1人だったのに……
たった1人で頑張ってたのに……
ワタシは、捺樹チャンは死んでもないのに……殺してもない宮藤を恨んで……憎んで。
恨む……？
憎む……？
よく考えてみると矛盾。
何故、宮藤は殺してもない捺樹チャンを殺したと言ったのか……
何故、１０年前……7歳の時の事を覚えていないのか……
何故、捺樹チャンがいなくなってしまったのが5年前だと思ってたのか……

ワタシの頭の中は、何かが狂ってる。
「望月が言いたいことは、なんとなく分かる。」
「え？」
「今、記憶と記憶がすれ違ってるでしょ……？」
「……うん。」
「それも全部、教えるから」
「……」
ワタシは、５年間もの間、病院の一室で過ごしていたらしい。
だから、目が覚めたときには、５年が経っていたという訳だ。
目が覚めて、ベッドの隣にあった椅子には宮藤……
「良かった。
それと、捺樹のこと……ごめん。」
そう言って病室を出ていってしまった。
それから、１日だって会う事はなかった。
……だから勘違いしてしまったんだ。
宮藤が捺樹チャンを殺したんだ、と。
この５年間……そこには、そんな事実無かったのに。「嘘じゃないよ……深舩俺を殺したと思ってる。」
「え？」
捺樹チャンは、こうして生きてるのに……
それは、宮藤も知ってるはずだし……。
「深舩は、全部自分のせいだと思ってる……俺の体が動かなくなったことも」
「だから……」
辻褄が合った。
『俺が捺樹を殺したから？』
何だか、涙が溢れた。
自分を責め続けてる彼をワタシは、追い詰めてしまったんじゃないか？
彼の気持ちを踏みにじってしまったんじゃないか？

彼の気持ちは、いつも捺樹チャンとワタシに向けられていたのに……
なんて、ひどいことをしたんだろう……
「謝らなきゃ……」
……っ！！！！
ワタシは、何を言ってるんだろう……
久しぶりに捺樹チャンに会ったのに、１０年も会ってない兄との再会なのに……
でも、このまま宮藤が現れてくれない気がして……
「行っておいで？」
「捺樹チャン……」
ありがとう…
「深舩も後悔してる」
何のことかは、分からなかったけど……気づいたら扉に手を掛けていた。
「昔、３人で遊んだ公園っ」
「ありがとっ」
どうして、捺樹チャンが宮藤の居場所を知っているのか不思議に思ったけど……
それと同時に忘れていたはずの景色が浮かんだ。
ブランコと滑り台、ベンチが２つ……ただ、それだけの小さな公園。
でも、ワタシ達３人は笑っていた。

今頃になって思い出すなんて……

今まで忘れてしまっていたなんて……

本当にバカだ。
ワタシはもう、とっくに……

始まり

ハァ、ハァ、ハァ……
「思い出したの？」
ブランコに腰掛けてる深舩が何ともないように言う。なんで、そんな平気そうに言えるの？
「バカっ……勝手に消えるなっ」
「……」
違う……そんな事が言いたかったんじゃない。
ワタシは……
「ゴメン……それと、ありがと。」

勘違いしてて、ゴメン。
ずっと宮藤を責めててゴメン。
辛い思いをさせてゴメン。
1人で背負わせてゴメン。
酷いことばかり言ってゴメン。
「ゴメンなんて……
ありがとなんて……
言われちゃいけないっ」

また、ワタシのところに戻ってきてくれてありがと。
ずっと側にいてくれてありがと。
守っていてくれてありがと。
いつも笑顔を崩さないでいてくれてありがと。
ワタシのこと……
捺樹チャンのこと……
「助けてくれてありがと。」
「俺は、助けられなかった……だから捺樹の体は……っ」

やっぱり、自分を責めてるんだ……
「あれは、ワタシのせいだ……」
本当は、ワタシが悪かったんだと思う。
「俺が殺したっ……捺樹の自由を奪ったんだ……っ」
「勝手に殺さないで……」
「俺が助けなかったから、捺樹の体は動かなくなったんだよっ」
「ワタシもそう思ってた。」
ワタシがもっとしっかりしてれば、捺樹チャンに頼らなくてもよかったんじゃないか……？
ワタシが1人でも平気だったら、殺されかけることもなかったんじゃないか……？
全ての原因をつくったのは、ワタシなんじゃないか……て。
「だけど、もう思わないことにした。
だって……」
自分を信じて……
胸をはって……
もう卑下しないで……
理由なんて……
人が変わる理由なんて、本当にちっぽけなモノなんだから……
「だって、捺樹チャン……笑ってたから」
そう言った矢先、宮藤の目からはボロボロと涙が零れていた。
「俺のせいなんだっ、俺が捺樹に……」
「違うっ」
「でも……っ」
宮藤の嗚咽混じりの言葉は、まだ続いていた。
「でも、捺樹は俺を責めないんだ……1言も……っ」あぁ……
分かるよ……ワタシもそう思っていたから。
「少しでもよかった。“お前のせいで”て言ってくれたのなら……
俺は」
きっと、宮藤は迷わず死を選んだのだと思う。

でも、捺樹チャンはそれを許さなかった。
もっと宮藤といたかったんだと思う。
「捺樹チャンには、宮藤しかいなかったんだよ……」「でも、俺は……っ」
「そだっ、捺樹チャンから伝言……
「俺達、親友だろ？もっと俺の前で笑えよ。」
てさ。」
この時、初めて宮藤の心の底からの笑顔を見た気がした。
「望月チャン、ありがとう。」
「うん。昔は違ったかもしれない……でも、今は救われてるよ？」
ワタシも気づいたから……
「ワタシも、捺樹チャンもね。」
伝えなきゃ……
「それとね……？」
ちゃんと……
「宮藤、ワタシね……？
ーーーーーーー……」
宮藤のこと好きなんだ、
て。

ワタシ達は、もう1度やり直すことが出来るだろうか……
いや、
やり直そう。
ワタシ達は、
もう1歩を踏み出したんだからーーー

ーＴＨＥ　ＥＮＤー

番外編

グス……グス、グス……
「何、泣いてんの？」
「……誰？」
「俺？……鈴堂　弥、ての。」
「アタシ……グス……長谷川つぐみ……グス」
「ふーん。で、失恋？」
「っ！！！！悪い～～～～？」「いやー？俺も……だし。」
「……」
「俺達、似てんね。」
「……どこがっ」
「俺、友達に好きな人とられちゃってさー」
「……」
「……？？」
「……アタシも」
「…アハハハハー、やっぱ似てるわー」
「よく笑えるね……」
「だって、笑ってなきゃやってられねー、て。」
「何、それ……クスクス。」
「あー！！長谷川だって笑ってんじゃんかー。」
「うるさーい！！それと、つぐみでいいから。」
「……じゃ、俺のことも弥で。」
「……うん。」
「……」
「……」

♪：キーンコーンカーンコーン～

「やばっ、行くぞっ？」
「腰、抜かしてる……立たせてよ……」
「はぁー？ババアかよっ」
「聞こえてるからね？」
「地獄耳……っ」
「だから、聞こえてるっ」
「はいはい……ってか、いい加減泣き止めよなー」
「っるさいなー、泣き止んでるよっグス……グス……」
「泣いてんじゃねーか…」
「っるさーい、グス……グス……」

繋がれた手から伝わるのは、どんな気持ち？
彼らがもう既に
1歩を踏み出しているのは……
また、別のお伽噺。

―THE　END―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7352r/

Ｚwei

2011年5月30日21時18分発行